

25周年を迎えて

私がシニア自然大学校にお世話になることになったのは、2015年に遡ります。会社を定年退職し、人生の余暇を楽しみたいというボンヤリした思いで、ふと目にしたシティカレッジの受講生募集のパンフレットを手にし10月開講式に臨みました。

受講したのは文学・歴史Ⅰで、かつて読んだことのある現代文学、古典文学を読み直し、大阪の歴史を学ぶという知的好奇心をくすぐる楽しい講座でした。

大阪教育大天王寺キャンパスが教室で、昼休みは共に学ぶ受講生と学生食堂で昼食を摂りました。あるとき親しくなった受講生の友人とキャンパス内を歩いていると、友人が道に落ちていた木の枝を拾い私に尋ねるわけです。「大蔵君、何でここに木の枝が落ちているか分かるか？」と。

「???」唐突な質問に言葉が出てきません。「風が吹いて折れた。」「何らかの強い衝撃が加わり折れた。」「鳥が折った。」などと答えようとしませんが説得力の無い答えばかりです。

友人がゆっくりと語ってくれました。「これはクスノキの枝で、クスノキが不要とした枝を自分で落としているんだ。」それを聞き、私に衝撃が走りました。「不要とした枝を自分で落とすというのはどういうこと？」友人は植物の持つ不思議な仕組みを語ってくれました。「樹木は必要に応じて自己剪定を行っている。最も効率よく光合成を行うために枝葉を付け、非効率な枝は離層作り枝を落とすんだ。」と。

植物には興味もなく殆ど知識のない私はその話に驚き、植物の持つ不思議なしくみに興味を抱いたわけです。「そんなこと何で知ってるの？」と尋ねると、彼はシニア自然大学校の本科風組でこのような自然の営みについて学んだと語ってくれました。

文学・歴史Ⅰ及びⅡを2年間シティカレッジで受講した後、友人の勧めで2017年シニア自然大学校に入り本科24期風組を受講することになりました。

植物についてほとんど知識のない私にとって毎日が新鮮で、講師の方々から興味ある話や植物観察をする楽しみを教えていただきました。

特に植物が子孫を残すための巧妙な仕組みとして、花粉を運ぶ〇〇媒花、種を運ぶ〇〇散布の話が聞かされた時は本当に驚きました。植物にある根、茎、葉、花どれをとっても意味あるもので、生きていくうえで不可欠の機能を持っていることを知りました。

植物にはいろんな葉の形、花の形がありますが、色々な環境の中で生存していくとき、最も効率的な形を進化していく過程で形作られてきました。

元来私は、感動した出来事や知識を知人に話すのが大好きで、植物の不思議や驚きを仲間たちと語り合う時間は楽しいものでした。

本科のカリキュラムは多種多様で自然に関する講座が多数準備されており良く出来た講座だと感心する中で、教育実習という別途体験的に学ぶプログラムがあり、「インプリ入門講座」の実習を受けるため長居植物園に行きました。私たちの班を担当してくれたのはⅠさんで、植物の不思議や驚きを楽しく、分かりやすく話していただき、そのプレゼンテーションの素晴らしさに感動を覚えました。

自分が体験した植物の不思議や驚きそして素晴らしさを他の人に伝え、同じ感動を共感してもらうことで植物の素晴らしさを知っていただく。この伝え方には合理的な手法があり、それを「インタープリテーション」と呼ぶことを知り、またそれを活動の軸に据えている組織があることが分かり、進路ガイダンスで「インタープリテーション科」の扉を開くこととなったわけです。

25年間に及ぶ活動で、インタープリテーション技術の向上を目指し、今日の礎を築いていただいた先輩諸氏に感謝申し上げます。

2021年度代表 大蔵 晃